

おける人間の弱い赤裸々な面を表し、全く餓鬼道と思わせるものであった。そこには学歴も教養も地位身分などは全く関係なく、それらは平常の社会生活でしか通用しないものであると痛感した。

平成九年七月十三日より五日間、全抑協のシベリア慰霊訪問団に参加し、「背広姿でのシベリア訪問」の永年の念願を漸く果たした。

私達第二班の訪問地は、ウスリースクとアルセニエフ周辺であり、私の希望地とは異なっていたが、いずこも私のいた作業地と環境が似ており、当時の生活を偲ぶのに十分であった。十カ所の墓地を慰霊訪問したが、既に石碑や墓標が建っていた所もあり、私達は新たに二カ所に、日本より持参した白木の墓標を建てて供養した。黙祷・弔辞・「異国の丘」の斉唱・読経と、全員はそれぞれに亡き戦友や肉親の冥福を涙ながらに祈った。

大切な私の青春を奪った三年間の抑留生活は、私に強い反ソ感情を抱かせたことは否めないが、反面、多くの貴重な教訓も与えられた。来年五月で私の帰還五

十年を迎える。今では怨讐を越えて、ロシア経済の立ち直りとロシア国民の幸福とを心より念じる心境に至っている。

抑留三年の記

岐阜県 可知 滋 男

昭和二十年八月十日現地応召、牡丹江兵事部に出頭、なぜか兵事部前で開拓団幹部に十二人ほど見捨てらる。十一日、星輝中学校庭で部隊編成、牡丹江特設警備隊豊浦部隊三浦大隊山本中隊に編入、十五日、牡丹江撤退、十八日、横道河子で停戦、二十三日に拉古まで戻る。官舎を鉄条網で囲って収容所建設、ここで千人単位の梯団編成あり、第五大隊（三浦大隊）。

九月八日、拉古を出発し、歩いてマイフンガ綏芬河を越え、グロデコーヴォで車に乗せられ着いた所はスイソエフカの山の中、五六八労働大隊。薪伐採で越冬、ノルマは一人一・五立方メートルで三〇%ほど、成績如何で糧

秣の増配ありで、上の者よりしばられる。零下四十度の作業も今は夢。

二十一年四月アントノフカに全移動、用材伐採と搬出、白樺やイタヤ楓の幹に傷を付けて樹液を採って煮詰めて甘味料とする。ワラビとヨモギで餅を作って焼いて食う。蚊の大群に閉口。

八月初め、五十人ほどで移動、海岸近い山中でノブイモスコウという、幅二十メートルほどに切り開いていく伐採、百五十人ほどの収容所。川の増水で糧秣が切れて、三日ほど塩茶のみの事あり。

山ブドウと茸が豊富。蝸牛の大きなのがいて焼いて食う。十月、身体検査で三級者になり、十五人ほど山を下りてシベリア鉄道沿線のラスドニヤ収容所、百五十人ほどに落ちつく。作業は五階建ての建物の内装工事、左官仕事。十一月、街外れの第二分所へ移る。五十人ほどで、製板、貨車おろし等の作業。電灯がある収容所。飯分配を棹秤を各班作っていて朝食は何グラムと炊事の報告で量って分配。たまげる。

二十二年四月、三十人ほどボシエツト湾へ材木の船

積みに出張。入船まではノンビリと潮風に当たっていたが、入船後は昼夜二交替で夜に回されグロッキー。出船後直ちにラスドニヤへ一カ月ぶりに帰る。着いたら増員して出発。平原に着いたら張鼓峰とのこと。旧満州から馬の来るのを待って、百五十頭受け取り、貨車に乗せ出発。着いた所は、おなじみのスイソエフカ五六九労働大隊の山の分所へ。馬車で薪材を出す作業、馬に使われて休日も何も無し。馬糧のトウモロコシが馬ならぬ人の口にかなり入る。管理不十分で十一月初め国営農場ソフホーズに馬を渡すまでに二十頭ほどの世送り。人の口へも入った様子。馬を出した我々も収容所をたたんで更なる山奥の分所へ。

二十三年一月、三級者十三人ト山命令、スイソエフカの病院の下働き。ボイラ室への石炭運搬、山への薪材積み等、またヤミ仕事の将校官舎の雑役、薪割り等、証明書一つでかなり街を歩いた。五月、ソ軍医来たり検査、我々五人は山へ。残りはダモイらしい。山の分所で一カ月足らずで六月夜半に下山し、国営農場ソフホーズの使役二十人。前任者の小舎で炊事すること

になる。皆の仕事はキャベツ畑の草取り、漬物用のトマトの収穫。

九月交替命令で交替して、原隊、スイソエフカ駅前に戻る。山の分所も終えて駅前に集合し、五百人ほど、主に土場整理。十月半ばダモイ実現。最後の貨車積みで一人犠牲の出たのは痛恨事。積み込んだ貨車に乗ってスイソエフカさらば。

ナホトカで五十人ほど残された組に入り、船積みに従事。十月二十八日から二十九日入港の英彦丸に乗船できる。主力は千五百人ほど、モスクワ帰りで、二千五百人と引揚げ始まって以来の乗船数であったとか。船内でリンチしきり。

十一月一日、夢見た日本、舞鶴港へ着く。早朝、緑濃き日本の山々を眺めて落涙。上陸しDDTの洗礼、入浴、復員業務を終わり、郷土室で近親者の懐かしい便りを読んでいる折、戸外で大乱闘、十人ほどタンカで運ばれる。

十一月五日、七年ぶりに故郷の駅頭に立つ。
シベリアの労苦も、同じ日本人によって苦しめられ

た事が沢山あったのが誠に哀しい事で残念でならない。

シベリア抑留を

赤化と敬遠された屈辱

岐阜県 吉村 昭春

昭和十五年十二月、満州牡丹江省寧安県七星坂下村に開拓団として入植しました。同所にはすでに我が坂下町の先遣隊が開村されており、希望に燃えて渡満いたしました。赤い夕陽の茫々たる大地を目の前にして思わず胸のたかまりを覚えたのを、つい昨日の出来事のように思い出します。

昭和二十年八月十日、召集で三浦大隊に入隊いたしました。問もなく終戦を迎え横道河子で武装解除を受け、昭和二十年九月十二日に入ソ、ウオロシロフの収容所に入り、抑留生活が始まりました。

その後ハバロフスクなど三カ所ほど転々と収容所を変わり、昭和二十三年十二月明優丸で帰国するまで三